

六 木造多聞天立像

もくぞうたもんてんりゅうぞう



正面



面相部左側拡大



左肩喰部拡大



獅喰部拡大

時代 平安時代後期(一世紀後半〜一二世紀初頭)
 総高 一一三・三センチ
 所有者 観音院
 指定年月日 平成二七年四月一三日

本堂向かって左側におわす多聞天は北方を守護する「四天王」のひとつである。連珠文(れんじゅもん)と花文を彫出した冑(かぶと)を被り、齒列を見せて口を開き、憤怒の相を表す。左手に宝塔を持ち、右手に三叉戟(さんさげき)を突いて、右にやや腰をひねり、左足を上げて二邪鬼の上に立つ。肩甲に肩喰(かたくい)を表し、胸甲・腹甲・上下の腰甲・手甲・脛(すね)甲を着け、獅喰を表した革帯を巡らす。広袖の裳と両脚には袴を着装する。

構造は寄木造で、木芯を左後方に外した一材より、両肩を除く頭体部を彫出し、襟元内側で頭体を割り放ち、内割を施す。背面襟首から左脚付け根裏と右脚後方寄りに至る線で背面一材を矧(はぎ)付け、両肩も矧ぎ付ける。両手首・右脚のほぞ・裳先は折損したものを補修しており、冑の後方左側から背面にかけても補修が見られる。

右脚沓先(くつさき)と宝塔は江戸時代以降の後補である。邪鬼と磐座は一材で背面側に横位に別材を当てて補修する。本体と同時に制作されており、鈍(なた)彫り風の加工がなされ、彩色が施されることにより、素地である本体の細やかな調整を引き立たせている。本像は、木肌が筋肉の強さを強調し、厳しい顔が一段と凄みを増し、剛直さが感じられる。

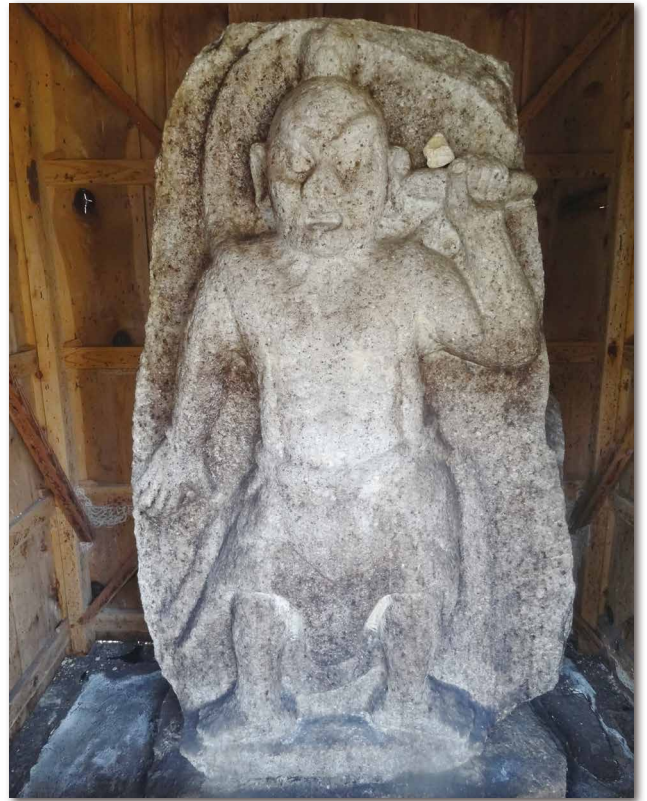
多聞天と持国天は平安時代後期の技法をよく残しており、現在までに市内で確認された最古の二天立像である。また、多聞天が左向きで開口し、持国天が右向きで閉口すること、振り上げる腕と腰つき、踏みつける脚などが対称的であり当初から阿吽(あうん)の二天立像として祀られたものと考えられる。



正面



面相部右側面



兄弟仏(像高 165 cm 滋賀県西光寺跡)

今枝家への像伝来の経緯は不明であるが、作工が酷似する「兄弟仏」と考えられる金剛力士像(阿形)が滋賀県蒲生郡竜王町鏡所在(「道の駅竜王かがみの里」に隣接)の西光寺跡で確認されており、何らかの事情で当地に持ち運ばれたものと想定される。

なお、霊験新たなかな靈仏として崇敬されていたことは室鳩巢筆と伝えられる「此奥靈験二王在」の石碑が同じ堂内に残されている。現在は今枝仁王尊奉賛会により保存・管理され、地元の守護仏として参詣者を集めている。

今枝家は、二代藩主前田利長に仕え、代々家老職を務めた。金剛力士立像は石造物で、地元では「執金剛神 今枝仁王尊」として親しまれている。はじめは同家の下屋敷庭内にあったが、廃藩後、堂を建てて安置する。

金剛力士とは仏教の護法善神である天部のひとつである。本像の石材は花崗岩(かこうがん)で大きな岩体から離れた転石(てんせき)を利用しており、立体的に彫り出す「厚肉彫り技法」により造像されている。像背面中央部には自然面を残すが、背面両側部は「矢穴技法(やあなぎほう)」により不要な石材が取り除かれている。像側面は工具による細かな調製痕が残されているが、全体的には丁寧に仕上げられている。木彫像に比べて肉付きは弱いが、頭部と体部とはバランスのとれたプロポーションをもっている。

今枝家は、二代藩主前田利長に仕え、代々家老職を務めた。金剛力士立像は石造物で、地元では「執金剛神 今枝仁王尊」として親しまれている。はじめは同家の下屋敷庭内にあったが、廃藩後、堂を建てて安置する。

時代 室町時代(一五世紀前半)
 像高 一六六・〇センチ
 所在地 金沢市長土堀一丁目一六番六号
 所有者 今枝仁王尊奉賛会
 拝観時の注意 日中随時可能、扉の開閉要
 指定年月日 平成二八年九月一二日

七 石造金剛力士立像(吽形)



右斜め



正面

八 木造日蓮聖人坐像

もくぞうにちれんしょうにんざぞう

時代 室町時代 文明四年(一四七二)
 像高 五〇・〇センチ
 所在地 金沢市薬師町口七五番地
 所有者 本興寺
 指定年月日 平成二七年九月一日
 拝観時の注意 寺院に連絡必要
 連絡先 〇七六一二五八一―一五四一

一乗山本興寺は、北陸における日蓮宗の古刹である。日蓮聖人の法孫日像聖人が、永仁二年(一一九四)加賀巡教の折、当時真言宗の当山を改宗し、時の住職兼運を二世として開かれた。中世においては加賀三谷法華の中核寺院に位置付けられている。なお、本寺院は通称「あじさい寺」(六月中旬に見頃)としても知られる。

日蓮聖人坐像は、祖師堂に安置されている。その特徴は玉眼による鋭い眼光に眉を寄せ、眉尻を上げた眉毛、鼻筋を通して小さく結んだ唇に大きな耳が垂れる。胡粉(こふん)で彩色されたその生気に満ちて写実的な面相からは青年期の日蓮聖人の姿を見ることができ、姿態は正装に身を包み、左手を屈して経巻(後補)を持ち、右手を膝上にして扇子(後補)を執る「説法像」で、その姿は今にも見る者に語りかける。法衣の上に袈裟(けさ)を掛け、袖口を前にして端を左右に長く跳ね上げた衣は印象的である。

坐像の頭部内面には祐俊という仏師が制作し、収恩・実有・堅乗という三名の本願主により文明四年(一四七二)に寄進されたことが記されている。仏師祐俊の名は金沢市伝燈寺町の臨済宗傳燈寺の木造釈迦如来坐像にも確認できる。また、像の腹部胎内には観音開きの厨子(ずし)を安置する。その内部には日蓮と直弟子日朗と孫弟子日像の遺骨を納める堂形の舍利塔が納入されている。県内では羽咋市妙法寺像が最古の像例で、次いで本例となり、室町時代中期の基準作として、願主・作者名のわかる貴重な仏像である。



面相部拡大



正面

九 もくぞうぶつねはんぞう
木造仏涅槃像

時代 江戸時代
 像長 二一〇・〇センチ
 所在地 金沢市中央通町一一番四六号
 所有者 法船寺
 指定年月日 昭和五三年四月一日
 拝観時の注意 非公開
 連絡先 〇七六一二二一―八〇一七

法船寺は尾張犬山（現在の愛知県犬山市）にあった浄土宗寺院で、前田家が越前府中（現在の福井県越前市）などへ移封と共に移転を繰り返して、現在地に寺地を賜る。旧本尊の（一生単信之尊像 光明仏）は藩祖前田利家が豊臣秀吉から奥州統一の戦利品として拝領したものと伝わる。

涅槃仏とは、釈迦が沙羅双樹（さらそうじゆ）の下で二月一日に涅槃（一般的に死）に入った時の状態を、絵画や彫刻で表現したものをいう。

この像は 木芯乾漆造で上衣は通肩（つうけん）、右脇を下に右手を頭の下に枕上に置き、横向きの寝姿である。左手は肘を伸ばし、左腰上に置く。この様な大作の木彫涅槃像は北陸地方には珍しく、涅槃図は禅宗や浄土宗の寺院に多いようである。

顔や身の一部の漆がはがれており、信仰心の篤い信者により触れながら祈ると共に仏の暖かさを感じたことでしょう。



正面

一〇 木造阿弥陀如来坐像(金沢大仏)

もくぞうあみだによらいぎぞう

時代	江戸時代(一七世紀)
像高	二七〇・センチ
所在地	金沢市寺町五丁目五番一八号
所有者	浄安寺
拝観時の注意	寺院に連絡必要
連絡先	〇七六一二四一―四二三七

浄土宗炭松山浄安寺は、天正三年(一五七五)に藩祖前田利家の命により尾張荒子出身の僧白誉が開山したといわれている。当初は旧古寺町(現在の片町付近)にあり、元和元年(一六一五)に現在地に移転した。本堂には御本尊の丈六の阿弥陀如来坐像(像高約二七〇センチ)がおわす。延宝元年(一六七三)十一世面誉上人の時に造立され、宝暦九年(一七五九)の大火にも寺堂が全焼する中、難を免れたと伝えられている。

像は寄木造で、中は空洞、胎内には寄進者名連署の巻紙と胎内仏を納めると伝えられている。螺髪(らほつ)以外の体と光背に金の漆箔(しっぽく)が施され、偏袒右肩(へんだんうけん)に衲衣(のうえ)を着け、心の安定を現す弥陀定印(みだじょういん)を結び、魚鱗(ぎょりん)葺きの蓮華座に結跏趺坐する。頭光背は中心部に蓮花文を刻み、その周囲に多くの阿弥陀如来坐像が、さらに外廻りにも少し大振りの六体の阿弥陀如来坐像が表されている。ふつくらとした面相には西方極楽浄土の教主であり四八の大願、中でも弥陀の本願の成就をなせる威光と慈悲が現れている。

なお、本書に掲載した浄安寺・玄門寺・蓮昌寺の仏像群と寺町極楽寺の阿弥陀如来坐像を含めて「金沢四大仏」と呼ばれている。



左斜め

一一 もくぞうあみだにやらいりゅうぞう
木造阿弥陀如来立像(金沢大仏)

時代 江戸時代(寛政一三年・一八〇一)
像高 八〇〇センチ(光背を含む)
所在地 金沢市東山二丁目一四番三三号
所有者 玄門寺
拝観時の注意 寺院に連絡必要、拝観料有り
連絡先 〇七六一二五二一六七六一

浄土宗孤峯山玄門寺は、加賀藩士内藤善斎が三代藩主前田利常より寺地を現在地に拝領し、僧玄門を開基として寛永一〇年(一六三三)開山した。阿弥陀如来立像は、宝暦年間(一七五一〜一七六四)初め頃、八世承誉の弟子即誉の発願により建立されたといわれている。また、寛政一一年(一七九九)大地震があり、十二世実誉の発願により同一三年再建の記録も残されている。

如来像の大きさは八〇〇センチもあり、上品下生(じょうほんげしやう)の印相(来迎印)を結び、西方を向いて蓮華座に立つ。裳の部分のみに金の漆箔が貼られており、光背は蓮華の回りに雲文を浮き彫りした頭光と舟形の身光からなり、頭光の回りに後光が付く放射光背(ほうしゃこうはい)で装飾される。

本堂は火災から像を護るため土蔵造りで、頭部に西日が差すように窓が設えられている。



正面

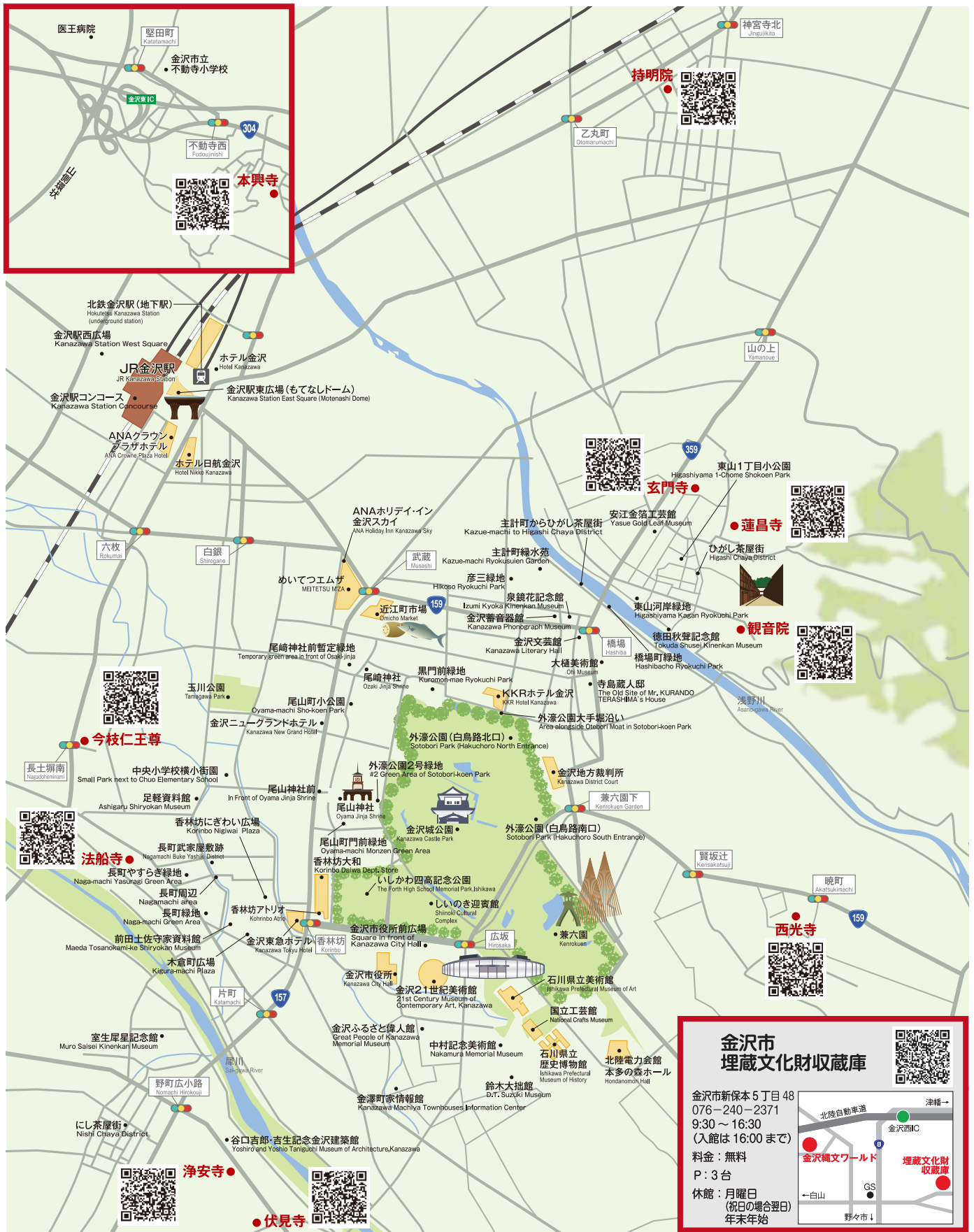
一一一 もくぞうしやくかによらいりゅうぞう
木造釈迦如来立像(金沢大仏)

時代 江戸時代(一七〇一―一八世紀)
像高 四八五・〇センチ
所在地 金沢市東山二丁目一番二三号
所有者 蓮昌寺
拝観時の注意 日中随時可能、扉の開閉要
連絡先 〇七六一二五一―一二二三

普香山蓮昌寺は、卯辰山山麓寺院群のほぼ中央部に位置する日蓮宗寺院で、天正一〇年(一五八二)僧日寿により越前府中(現在の福井県越前市)で創建された。慶長一八年(一六一三)寺地を拝領して金沢に移り、万治元年(一六五八)現在地に移転したといわれている。本寺院は三代藩主前田利常の生母寿福院の祈祷所(きとうしよ)としても知られている。

本像は丈六(一丈六尺)の高さ約四八五センチの木彫仏(寄木造)で、大仏殿に安置されている。造像は元禄年間(一六八八―一七〇四)といわれているが、仏師は不明である。元文元年(一七三六)寺院は焼失したが、難を免れたといわれている。そのお姿は、一切衆生に安楽無畏(あんらくむい)、人々のさまざまな願いをかなえることを誓う施無畏与願(せむいよがん)の印を結ぶ仏の誓願の意志を表している。西方浄土があるということ、面相は真西に向いており、西日が射し込む夕方は特に神々しく見えるといわれている立像は、蓮華座に直立している。また再建の際、浄財が集まらなかったため、皮膚の部分以外は金箔を貼ることができなかったともいわれている。

掲載寺院などの位置図



「探訪金沢の仏像 指定文化財と金沢大仏」

※本書は、金沢市と金沢文化財ボランティアうめばちの会が協働で作成したものです。

【協力】 今枝仁王尊奉賛会、観音院、玄門寺、西光寺、持明院、浄安寺、伏見寺、法船寺、本興寺、蓮昌寺

【発行】 金沢市文化財保護課

【編集】 金沢文化財ボランティアうめばちの会

【お問い合わせ】 金沢市埋蔵文化財センター内 金沢市上安原南60番地 Tel 076-269-2451 Fax 076-269-2452

【発行日】 令和4年3月31日

※二次コードはスマホまたはタブレットでご利用ください。目的地までルートマップを表示します。